

トピックス 今年度の企画展は「丸ごと100」

平成26年11月21日(金)から平成27年2月28日(土)までの100日間、「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展・丸ごと100-茅ヶ崎を知る100の機会-展」を開催します。

この期間、講座やまち歩きガイド事業を多数展開することで、普段なにげなく暮らす茅ヶ崎のまちの魅力を再発見できる機会を、市民のみなさまにご案内していきたいと考えています。

屋根のない博物館(エコミュージアム)の「企画展」を、どうぞお楽しみに!



▲企画展に向けガイド練習中!

トピックス ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会

(略称:ちがさき丸ごと博物館の会)の活動

- 丸ごと博物館の会 講演会 社会教育課と共催
9月9日(火)、講演会「イサム・ノグチとその周辺」を講師・長嶺敬子会員、市役所分庁舎6階コミュニティホールにて開催しました。聴講者は115名と大変好評裏に終えることができました。
- 丸ごと博物館講座
9月20日(土)「南湖の文化人巡り」 社会教育課と協働実施
南湖に住んだ文化人(平塚らいてう、小山敬三、萬鉄五郎など)について午前中事前レクチャー、午後まち歩きの構成で、受講者のみなさんと中秋の南湖を楽しく巡りました。
- 老人福祉センターのまち歩き
10月10日(金)、茅ヶ崎市老人福祉センター主催の「茅ヶ崎を歩こう・郷土の歴史再発見」で、十間坂~鶴嶺地区のガイドをします。
- 郷土会とのまち歩き「茅ヶ崎の文化財を巡ろう!」
10月17日(土)、茅ヶ崎郷土会が主体で、矢畑、円蔵、西久保の文化財を巡ります。
- 「ハーモニアスちがさき」放映中
「ハーモニアスちがさき」で鶴嶺地区周辺の史跡をガイドしました。番組は動画配信サービス「ユーチューブ」でご覧いただけます。
- ちがさきの大山道を歩く
12月6日(土)辻堂駅から鶴が台団地までの大山道とその周辺をガイドします。今年で3回目、文教大学の学生が社寺や史跡を案内します。11月に募集案内予定。

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館って何? 茅ヶ崎市の全域を屋根も壁もない博物館と見立てて、文化、歴史、自然、産業、商業、公共施設、人材など、「このまち」らしさをもついろいろな事柄を幅広く選び出し、これらを都市資源と呼ぶことにしました。これらの都市資源を調査・研究し、それぞれがもっている意味や魅力を広く市民に周知する一方、それぞれを関連付けて散策や各種イベントなどで活用を図ることにより、茅ヶ崎を改めて知り、茅ヶ崎を愛する心を育み、ひいてはまち全体の活性化を図ろうとするものです。そして、都市資源は地域のかげがえのない宝物として、地域により保護され育てられていくことになります。住民が、自分たちの地域の未来のために、自分たちの考えと力で運営していく姿勢を特に重要視しています。

編集後記

講演会「イサム・ノグチとその周辺」は平日の日中の開催にもかかわらず、非常に多数の方々にご参加いただきました。参加者のみなさまにいただいたアンケートには、講師の長嶺先生が日本だけでなく海外にまで出かけて調査研究をされたことにたいする敬意がたくさん書かれていました。多くの参加者のみなさまにとって、茅ヶ崎に住み、茅ヶ崎に関することについて学び、調べ、知っていくことの素晴らしさに感動する機会だったのではないのでしょうか。ちがさき丸ごと博物館では、これからも市民が主役の事業を企画してまいります。

屋根も壁もない・・・市内が全部博物館・・・



(愛称は「ちがさき丸ごと博物館」)

第21号
2014. 10. 1



「丸ごと博物館」誌上講演会 イサム・ノグチとその周辺

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館では、講座や展示、まち歩き事業など、市民のみなさんが茅ヶ崎の都市資源を学び、調査研究した成果を発表する機会を設けており、参加者からご好評をいただいております。

今号では、そうした事業の一つとして、9月9日(火)に開催した長嶺敬子さんによる講演会「イサム・ノグチとその周辺」の内容を「誌上講演会」と題して、会場にお越しになれなかった皆様にお届けします。



▲大盛況だった講演会の様子。平成26年9月9日(火)13時30分から16時まで。茅ヶ崎市役所分庁舎6階コミュニティホールにて。参加者115名。

イサム・ノグチ (1904-1988)

彫刻家、画家、インテリアデザイナー、造園家、舞台芸術家として活躍。
1987年アメリカ国民芸術勲章受章。
1988年勲三等瑞宝章受章。

出典:『世界芸術家辞典
<2010年改訂版>』
(小池書院)による

講演会「イサム・ノグチとその周辺」

イサムは明治37年アメリカ・ロサンゼルスで父、野口米次郎(ペンネーム:ヨネ・ノグチ 以下ヨネ)、母、レオニー・ギルモア(アメリカ人)の子として産声をあげました。父はイサム誕生より2か月半ばかり前に日本へ帰ってしまい、イサムは私生児となります。やがて、母と子は明治40年日本にやってきます。親子三人水入らずの家庭が築けそうと思ったのも束の間、ヨネはすでに結婚していました。母子はヨネの家を離れ自活の道を選びます。やがて二人は「空気がきれい」と定評のあった茅ヶ崎にやってくるのです。

茅ヶ崎市菱沼の牡丹餅立場(ぼたもちたてば)近くに住み、イサムは松林尋常小学校に転入します。しかし、地元の子どもたちとうまくコミュニケーションがはかれず登校拒否をおこします。でも、仕事から帰って来た母に癒やされ元気を取り戻します。ある日、母は赤ん坊を抱いて帰宅します。異父妹アイリスの誕生です。

イサムは「父にも母にも見捨てられた…」と喪失感を味わいます。しかし、イサムは自然豊かなこの茅ヶ崎ですくすくと育ちました。イサムは晩年を振り返り「僕のアーティストとしての開眼は茅ヶ崎で培われたものだ…」と語っています。
(2ページへ続く)

誌上講演会「イサム・ノグチとその周辺」

日本人として育てたいと考えていた母レオニーは、今度はアメリカ人として育てようと横浜のインターナショナルな学校に転校させます。だがそこでも差別！レオニーは自分たちのマイホームを築こうと出物を見つけ家を新築します。「三角な土地に三角な家を建てます」という友人に宛てた手紙どおり、まわりが広い別荘地の中に36坪の小さな家を建てました。イサムと共同で設計したというマイホームは、丸窓の中に富士山がくっきりおさまるレオニーのお気に入りの家となりました。茅ヶ崎では4軒の家を転居し、滞在は正味6、7年となります。

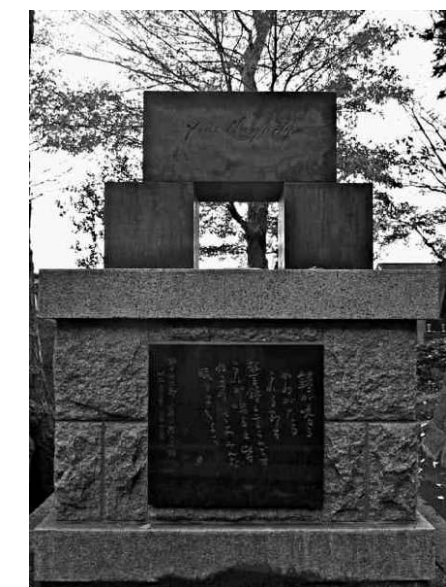
イサムは学校にも行かず大工に弟子入り、レオニーは家庭で教えることにしました。でも、しっかりと教育しなくては…と考えて、イサム一人をアメリカに帰します。

イサムは単身渡米。だがこの学校、2か月後に突然閉校。彼は一人取り残されてしまいました。やがて学校経営者ラムリーが救出。彼が親代わりとなり高校を卒業。ラムリーの家で暮らすこととなります。そんな時、レオニーはどうしていたのでしょうか？日本からイサム宛に便りを書けども書けども届かない。閉校になった学校には配達されず局止めになっていたのです。そうとも知らずイサムは「母にも捨てられた…」と絶望。

やがて育ての親ラムリー一家のいるニューヨークに行き、ラムリーに恩返しがしたくてコロンビア大学医学部に進学します。でも、夜な夜なアーティストとしての血が騒ぎ、医学の勉強は身につけません。

やがて日本から母と妹も帰って来ました。母の勧めもあり、レオナルド・ダ・ヴィンチ美術学校に通います。

昭和2年、奨学金を得て2年間パリに留学。ひとまわりもふたまわりも成長して帰って来ます。だが「勉強は西洋だけではない」と東洋の勉強に旅立ちます。ロシア・中国・韓国…、何か月も学びながら目と鼻の先の「日本に立ち寄りたい」と父に連絡を取ります。しかしヨネからの返事は「野口を名乗って日本には来るな！」というものでした。イサムは悩みますが、父に会いに行くわけではない。「日本の文化を学びたい」というおさえがたい気持ちから、日本訪問を断行します。たくさんの日本文化に触れ、多くの収穫を得てアメリカに帰ったイサムは『東洋の巡礼』の個展で喝采を浴び、芸術家としての地位を不動のものにしていきます。仕事、仕事で世界を駆け巡るイサム。レオニーはイサムの庇護を離れ自活の道を選びます。観光地で小物売る商売。日銭を稼ぎ日々の慎ましい生活を送るのです。



▲藤沢市常光寺 ヨネ辞世碑

だが、健康を害し、昭和8年12月31日、大晦日に死去（享年59）。イサムとアイリスは御影石で小さな墓を建てました。

日本は戦時色がますます強くなっていきます。昭和16年12月8日、真珠湾攻撃！一気に戦争は泥沼へ…。父の消息が分からなくなりました。イサムは八方手を尽くして捜します。一家は東京大空襲で焼け出され茨城に疎開していました。やっと捜し当てた父。親子の文通がようやく始まった時には、父はもう筆も執れないほど弱り果てていました。ヨネは疎開先で亡くなり、僧侶になった三男の寺に戻ってきました。藤沢市常光寺の文学碑には辞世の詩が刻まれています。『鐘が鳴る 鐘が鳴る…』故郷を思いながら詠んだのでしょうか。

戦争は多くの爪痕を残し終戦を迎えました。父・ヨネが40年も教鞭を執っていた慶応義塾。ここも壊滅的な打撃を受けました。この復興のプロジェクトに加わり「新萬来社（しんばんらいしゃ）」を建設します。イサムは各地で精力的に個展を開きます。

アメリカで着物ショーが開かれた折、山口淑子＝李香蘭がやってきます。彼女も国籍問題で苦労しました。イサムと境遇が似ていたため、二人はすぐに意気投合、結婚します。淑子30歳、イサム46歳。新婚生活がスタート。新居は北鎌倉、北大路魯山人宅内の一棟でした。



▲「ちがさき丸ごと博物館」名誉館長である服部市長も講演会に駆けつけてくださいました。

イサムは広島で平和に関わる仕事がやりたい。この一念で東西2つの平和大橋を作りました。さらに原爆慰霊碑の設計を望んだのですが最終的には不採用。これはまぼろしの設計図に終わります。イサムは（日本からも拒否された）と落胆しながら帰国します。さらに、一緒に渡米するはずの新妻・淑子のビザが下りません。なんと1年9か月もかかってやっと手に入れることができました。念願叶って、やっとアメリカでの生活が始まったものの二人の間には不協和音がたちはじめ、とうとう円満離婚で決着をみます。結婚生活わずか4年2か月。そのうちの1年9か月はビザ問題で揺れましたので、さらに短い期間でフィナーレを迎えました。

イサムは取り憑かれたように仕事に没頭します。『リーダーズ・ダイジェスト』、『ユネスコ本部』。日本にも高松市牟礼（むれ）に拠点置き地元の庵治石（あじいし）を活かし製作に精を出します。休む暇なく世界を駆け巡る、めまぐるしい生活。作品を一つ一つ書き連ねていたら紙面がいくらあっても足りません。

さて、最後の仕事は札幌市モエリ沼公園の仕事でした。産業廃棄物の山を楽しい遊具でいっぱいにして子供も大人も夢の持てる公園作りは、実に企画から完成まで16年の長期にわたる壮大なプランでした。まさかこれが最後の仕事になろうとは、まわりも本人も思いだにしませんでした。イサムは84歳を過ぎて決して衰えぬ体力、精神力を持ち続けていましたが、肺炎をこじらせて入院。わずか数日で帰らぬ人となりました。昭和63年12月30日。享年84歳。父の国・母の国、運命の宿命を担い、その狭間で彼はいつも揺れ動き苦しみました。

今、多くの作品に取り囲まれて、ニューヨーク・ロングアイランドのイサム・ノグチ庭園美術館で静かに眠っています。私はあなたが残したたくさんの作品を愛で、慈しみ伝えて行くことを約束します。安らかにお眠りください。（長嶺敬子）



▲『レッド・キューブ』（ニューヨーク）



▲イサム・ノグチ庭園美術館



▲イサム・ノグチの墓

都市資源
コラム

イサム・ノグチと

作家 獅子文六（ししぶんろく）と茅ヶ崎

イサム・ノグチが母レオニーに連れられ日本に到着し1年程後、落ち着いた先は東京大森の山王付近だった。その住まいは偶然にも16歳頃の獅子文六が住んでいた家の隣であった。文六はレオニー一家に始めて会った時のことを『へなへな随筆「イサム君」』に次のように書いている。『外国人が越して来た。とても背の高い、顔が赤い感じのする婦人で男の子が一人、幼い女の子が一人、日本人書生が一人いた。しかし不思議なことに門の表札は野口という字が書いてあった』。またレオニーのことを『新聞の金髪美人というのは、ウソだった。骨張った顔で、ペンのように鼻が尖り、今から考えると、外国婦人として、むしろ醜女に近かった』。

越して来てまもなく、隣家のよしみで文六の母や姉とレオニーは仲良くなり、家族ぐるみで交際したようだ。イサムはその頃、七、八歳で、毎日のように文六の家に遊びに来て、文六とも遊んだ。一方、文六が中学5年生か大学予科の頃、英語の勉強のため、レオニーからメーテルリンクの英訳脚本集なども借りたりしている。

その後、レオニー一家は茅ヶ崎へ移転する。文六はレオニーに英会話の勉強を教えてもらおうと茅ヶ崎を訪ねる。へなへな随筆にはその時のことを『初夏の晴れた日だった。私は土産物を持ち、ハカマを穿いて茅ヶ崎へ出かけた。当時の茅ヶ崎は、駅を降りると、人家も少なく、砂地の道の両側は果樹園だった。手紙の案内図で、辻堂方角へ歩いて行くと、村道沿いにポツリと一軒立ちの、小さな新築の家ですぐわかった。』とある。このとき、文六は海でレオニーと競泳したり、イサムと一緒に無人の團十郎別荘（九代目市川團十郎死後約10年）を覗きに行ったりしている。このあたりの記述は当時の茅ヶ崎を大変良く描写している。

その後、文六とイサム達との交流は途絶えるが、『ある時、新聞の学芸記事に新進彫刻家イサム・ノグチの名を認め感慨を催した』とある。獅子文六とイサム・ノグチは、その後会うことがなかった。しかし、彼らはお互いに意識しながら同時代を精一杯生き抜いたように思えてならない。（加藤）

※獅子文六全集 第14巻 朝日新聞社 昭和44年4月20日発行

へなへな随筆「イサム君」昭和27年1月「文芸春秋」より参考一部引用した。